隣　～自転車に乗った天使～

浄化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隣　～自転車に乗った天使～

【Ｎコード】
Ｎ０５４３Ｌ

【作者名】
浄化

【あらすじ】
天使は幸せを届けるものではない。とある姫のただの下僕。だけど、天使だって人と共に暮らすわけよ。そんな中、隣にだれもいないなんて寂しいじゃない！！
とある世界のとある姫に仕えるとある天使は隣を求め続ける……。

ぷろろ～ぐ　（前書き）

こんにちは！ってなんだよ、
でだしが思いつかないから適当に挨拶するってかなり馬鹿らしいけど
ってか、警告するものも内容に普通な小説なんだけどなんとなく前
書きを書いてみたいから書いている私ってなんだって、まあいいか。
えっと、ここまで読んでくれてありがとうって、最初に書いてんじ
ゃネーよ。
「コメディーに入れろよ」なんていわないでください。こっちにも
ちょっと浅い考えがあります。
とにかくここまで読んでまぁよんでやってもいいかなって思った
人！　読んでもらえるとすごく嬉しいです。つまらなそーって思っ
た人もなにげここまで読んでんなら本編も読んでください！！
では、本編へＧＯ

ぷろろ〜ぐ

ぷろろ〜ぐ

ここはどこなのだろう？　あなたは誰なのだろう？私はそう思うより前にここを懐かしいと感じた。この小さな民家、雄大な景色。目の前に座っている少女も。

少女は、ふと思いついたようにつぶやいた。

「昔、君の隣には誰かいた？」

「昔はいたけど、もうだれもいませんね〜」

「そうなのね。なら、私の隣に来なさい」

少女の言葉に驚き、少し身を引いた。

「私の隣に来てちょうだい」

少女は澄んだ瞳で自分を見つめる。うぅ、断りにくい。

「でも、初対面なんですよ！？　」

そうよ初対面。いきなりそんなことって……。

「そんなの関係ないわ。あっでも、私は光姫（コウヒメ）、お姫様だったわね。身分さがかなりすごいかも。うーん、どうしましょう？　チェロ、なんか思いつかない？　」

少女、否自称お姫様はひざの上に乗っている犬に向ってたずねる。尤（もっと）も犬はしゃべらないと思うんだけど……。でも、その自称姫は納得したように笑って、こっちを向いた。なんかいやな予感がする。

「そうね、なら私の下僕（しもべ）、天使になって頂戴。拒否権はないわ」

最初、天使は思った　　呪いごっこ（前書き）

呪われてるって言われた事ある？

最初、天使は思った　　呪いごっこ

呪いごっこ。

私はあの事をそう呼ぶ。誰か一人を呪いの発生源って考えてその人に触ったらその呪いが触った人に着く。そしてそれをまた別の人になすりつければ、今度はその人に呪いが移る。そういう遊び。言うなれば、鬼ごっこなんだよね。

でも、鬼になること追われる子はいつでも友達なのが鬼ごっこだとしたら、呪いごっこは違うんだよね。呪いごっこで呪いの発生源になっている子は嫌われている子。原因はほとんどが汚いから。不潔だから。

え？　何でそんな事書いているんだって？　それは、現に私が呪いごっこの標的だったから。

でも、私汚かったはずないんだよね～。爪を噛むとかそういう癖もないし、私の黒くて長い髪は毎日綺麗に洗っている。念入りに！

顔だって丁寧に洗顔クリームで洗ってるし、毎日同じに見えるような真っ黒なワンピースも実は五着持っててそれはそれぞれでしっかり洗ってる。アルコール消毒も大好き。

だからさ、つまりは私は不潔でも汚いわけでもないのに呪いごっこの標的なのよね。なんでだと思う？　え？　性格が悪いから？　でも、そう言う人は逆になじめるはず。よく自慢するから？　私が自慢するほどのものを持っていると思う？

つまりはね、私はそのまんまの意味で呪いなわけ。もっというと、私は他からみて呪われているらしいの。ふぁんたじーとかで出てくる悪魔みたいな感じ。多分だけど。とにかく私は呪われているのよ。

そうするとまた何で呪われていると思われているのって話になるけどさ、それはストレートな意味で私が呪われているように見えるから。説明になってないかもしれないけどこれが一番ストレートな

言い方。えっとそのつまりは……私の周りで人が死ぬのよ。正しく言えばもうじき死ぬ人のところに私が行くんだけどね。でも、周りからは私が呪われた子で私が行く先々で人が死ぬって思われちゃっているわけ。まぁ、そう言う考え方もありだけどやっぱり本人としてみればそれは違うんだよね。私はもうじき死ぬ人のところに、魂と切り離される記憶を取りに行くだけ。そしてその記憶を光姫（コウヒメ）のところに運ぶだけ。

って説明しても意味不明なだけか。まず記憶を取りに行くってところでよくわかんなくなるし。

≪助けて≫

来た。もうじき死ぬ人の声が聞こえた。場所はここから二十三？南。死ぬのは八十三歳のおばあさん。原因は老衰。

「家族、悲しんであげてるかな？　一人かな？」

一人なら、最後に私笑ってあげよう。だって、

天使だもの。

次に天使は動いた　　天使ってさいろんな漫画とか本とかに出てくるけどその

あなたの読んだ漫画とか本に出てきた天使はどんな天使でしたか？

次に天使は動いた　　天使ってさいろんな漫画とか本とかに出てくるけどそ

とりあえずまずは、２３？南にいって今死にそうになっているおばあさんの顔を一度拝まなきゃ。でも、二十三？とはちょっと遠いなぁ……。まいっか、羽使っちゃお。

――羽よ、開け――

バサッバサッ

両羽がすっと開いて行くのを感じる。私は天使。羽根を持っている。といっても、開くのはこうやってちょっと願えばすぐできるのである。だから、少女漫画で出てきた天使たちがかわいそうだ。本当に。魔法陣かいたり、羽の種無くしちゃって地上をさまよったり、変な呪文唱えたり。本当に可哀想。

そんなことを思ったりしながら、灰色の雨が降りそうな空を飛ぶ。ついでに言うとこの姿は普通に人間にも見える。それに、羽を使うのは結構疲れる。だから、あんまり使わないでいるべきなのだがやはり歩いて行くのは面倒くさい。それに、ここは人口の少ない農村だし。第一高度高かったら見えないでしょ。

でも、２３？は結構遠い。羽を使っている私がいうことでもないような気がするが。そのとき、額に水が当たった気がした。気のせいだと思ったけど、今度は鼻の頭にも当たる。雨かよ……。テンション下がるんだけど。あぁ、早くばあさんのところに着きたい。少なくとも屋根はあるだろうし。

とか思っていたら以外にも早くばあさんがいると思われる民家が見えてきた。羽すご！　といっても黒いワンピースも髪の毛もびしょぬれ。羽も雨を吸い込んで重くなっている。天子の敵は悪魔より雨なのかもしれない。でも、そんなこと気にしている余裕はない。

死神より早く着かなきゃ。ま、それより前に羽を何とかしなきゃね。

――羽よ、閉じろ――

バサッバサッ

羽はすっと閉じて行く。体がいっきに重くなり、地面に近づいて行く。

「イタッァ」

着地は失敗。しりもちをついてしまいワンピースは土でかなり汚れてしまった。だけど、気にしている余裕はない。目の前にある茶色い屋根の小さな家（小屋とでも言うのかな）、しかも水車つきのなかに私は入ろうとした。でも、ドアが開かない。雨を吸い込んで体積が増えているのかな？

「だれか動ける人いますか？」

とりあえず言ってみたけど応答はない。ちっ、ドアけち破るしかないのか。まぁいいか。仕事だし。ついでに、私天使には特別な能力はほとんどない。せめて羽が使えたりするぐらい。だから、漫画の天使たちはいいんだよね。幽霊見えたり、シールド貼ったり、願いがかなったり。嗚呼、ずるいずるい。

まぁそんなことは関係ない。しょぼいけど、ドアに体当たりする。一回、三回、七回、十五回……。全然あかない。

「お前天使か？」

背後からふいに声をかけられた。この声は、多分……。

「死神、か弱い乙女がドア破ろうとしてんの手伝わないなんて最低だな」

冷静に言ってみる。

「お前の何処がか弱い乙女なんだよ。まぁいい。どけ」

そう死神は言うと私を投げ飛ばす。

「ちょっと、ひどい！」

そんなこといっているうちに物が砕ける音がした。多分、死神の鎌（デスサイズ）でドアを壊したのだろう。ついでにこの死神の場合は名前だけが死神の鎌なのではなく、まじめに鎌を持ち歩いている。

「ほらあいたぞ」

「ありがとさん」

「それだけかよ」

……私は民家に入って行く。すると、中には一人中年男性がいた。かなり太っている。つまりは、私の天使の勘は外れたらしい。まぁ、場所はあってただけましだけど。

《これが天使……》

「そうよ。私は天使」

にこっと笑ってみせる。すると中年男性も笑った。

《俺、死ぬのか》

「死神さん、よろしくね」

「おう」

そういうと死神は目を閉じ念じる。そして、目を開けた瞬間釜を中年男性に振り下げた。

すると、その中年男性の体から二つの光が出てくる。黄緑の光とピンクの光。死神は黄緑の光を手で掴みポケットの中に入れた。私はピンクの光を掴む。そして目を閉じ願う。

――光姫（コウヒメ）様。こちらが本日の記憶です。どうぞ、お食べください――

そう願うとその瞬間ピンク色の光は消えた。光姫のところにいったのだ。

「仕事終了、さっさと帰ろう。天使、またな」

死神はさっさと帰っていく。私は……、ここでもう少し雨宿りかな。

次に天使は動いた　　天使ってさいろんな漫画とか本とかに出てくるけどそのへタだ……

>i6648—1048<

そのまた次に、天使はショックを受けた　　年下の子（前書き）

年下の子に悲鳴あげられたらさすがにショック受けます。

そのまた次に、天使はショックを受けた　年下の子

「おじさん、私だよ。中はいるね」
そんな声がさっき壊したドア辺りから聞こえてきた。八歳ぐらいの女の子の声だ。どうやらこの中年男の姪のようだ。その姪は中にづかづか入ってくるっておい、私ってここにいるのを見られては困るタイプのキャラ、存在してはいけないキャラじゃない！？　うわぁ……。どうしよ。なんて困っている私の事なんかお構いなくその姪は中に入ってきて勝手に驚いた。
「お……女」
女？　普通この状態だったら恋人とでも言うんじゃない？　……そういえば、この状態を見られて同じ事を言われた事があった気がする。あの時は確か――そうだ。若い青年の記憶を回収しに来た時、後片付けをしていたら、いきなりその青年の恋人と思われる人が部屋の中に入ってきて、「お……女」と言って怒りだしたのだ。
つまり、この少女は中年男の……
「なに手を出してるのよ！？　私の男に！　」
やっぱりだ……。恋人か。といっても、多分それはこの少女の妄想かまたは一方的な思い込みだと思うけどねぇ。少女に恋する中年男ならあり得るけど、中年男に恋する少女って云うのはやはりなかなかない。といっても今はそういう状況だけど。それでも、両想いはなかなかない。
「えっとその私は……」
私はとりあえず状況を説明しようとしたが、その言葉は少女の「あっ」という叫びに遮られた。
「死んでる……」
その中年男の下いい近づいてきた少女は気づいてしまったみたいだ。それが死んでいることに。ってことは、もしかして私が殺したと疑われるってこと！？　ちょっとそれは嫌だわ。ホント。年下の

子に悲鳴あげられたらかなり悲しいよ。
「あんたが、殺したのね！　ひどい！　最低」
天使に向かって殺したとかひどいとか最低とか、なんかずれてるようなずれてないような……。でも、この状況でそう思わない人間はかなりすごい。
「死ね」
そこまで言われてしまったら少し傷つくんだけど……。死ねって天使に向かって言っても無駄なんだけど。まぁそんなどうでもいいような感想はおいといて、その少女は本当に私を殺そうとしてきた。足元に落ちているカッターナイフ（何でこんなものが落ちているんだろう？）を使って襲いかかってきたのだ。
さすがに私も逃げた。天使は無力だ。だから、逃げることしかできないのだ。それでも少女は追いかけてくる事はないだろう。天使としての私を見かけた人間は、知った人間は、天使としての私を何故かすぐに忘れてしまうのだ。

天使だって、気分転換したくなる　包み紙ごと飴ちゃん（前書き）

包み紙も併せて飴ちゃんだと思っている少年は、おかしいのか。

天使だって、気分転換したくなる　包み紙ごと飴ちゃん

「つまんない。散歩行くか」

そう、私がなんとなく呟いて散歩に本気で行ってしまった日というのは、あの年下の子に死ねと言われてショックを受けた日からしばらく経ったとある日のこと。ついでに、今日は土曜日なので学校はない。え？　学校いってるの？　いってるんです。天使が本業だけど、まっせっかくだから学校いってるんだよね。あ？　戸籍とどうしているのかって？　それはふぁんたじーでの禁句というものではないんじゃないでしょうか。

まっとにかく散歩に行くんだけど、だからといって普通に歩くわけでは……ないわけではない。（作者！　ややこしいフェイントは止めろ）つまりは、普通に歩くだけだ。天使の散歩だからといって羽根をフル活用したりはしない。疲れるしね。それに、羽使ってたら普通の人にも天使ってばれちゃうしね〜。尤（もっと）もどうせすぐ忘れちゃうんだけどね。

「ジェルも行く？」

私は何気なく飼い犬のジェルに聞いてみる。といっても、天使の飼い犬だからといって人間の言葉をしゃべるわけでもなくただ「ワン」と一回吼えるだけなのであった。使い魔みたいな種類のものではないのだ。

私はなんとなくジェルを連れて走り出す。どちらかといえば、ジェルに引きづられて私は走り出すって感じなのだけれど……。そんな感じでしばらく走って行く。すると小高い岡が見えてきた。頂上には一人の少年がボロボロな自転車と共にねっころがっている。

「あーいうのをホームレスって言うの？」

と一言適当に呟いてからジェルと共に岡を登りだす。意外と角度が急できついけど、とにかく頑張って登る。ジェルは楽そうに楽しそうに登る（犬はいいな〜）

「ついたついた」
疲れたように一言わざと言って見るけど少年は反応しない。
「死んでる……？　」
そう呟いてみるけど、死んでいるという感じはしない。そのことは保障できる。腐っても天使だし。腐ってないけど。それに、頬が微かにぴくぴくと動いて見えた。
「飴ちゃんいる……？」
とりあえずそう言ってみる。といっても、この言葉は嘘ではない。ポケットから飴もちゃんと取り出そうとし――
「あぁぁ」
死人ちっくな少年は、私が飴を取り出した瞬間飴を掴んで包み紙ごと口の中に入れてしまったのだ。だから、もちろん包み紙ごと食べたのだ。咳き込むに決まっている。私はちょっと心配になって、声でもかけようかなぁ～、うん、かけよう。
「大丈夫で――キャァ」
その少年はいきなり包み紙だけ吐き出してきた。私の、ただでさえ汚かった少年に対する印象は多分この瞬間最低になった。
でもそんな私の様子にも気付かずに飴をガツガツ（？）と食べる少年。
これが少年との出会いであった。最悪だけれど……。

ちょっとした注意書き（前書き）

今気づいてしまった失敗は今、正すべきでしょ

編集は好きじゃないから。

あと、読まないべきですよ。本編とあんまり関係ないし。

話がややこしくなるし。

ちょっとした注意書き

今さっき気づいてしまった失敗があるので少しそれについて書きます。

面倒くさいなっと思った人は読まなくていいです。

これは、私の個人的な不安解消でしかないですから。

失敗って言うのはこの話の設定についてです。

天使としての私は忘れられてしまうと言うことについての矛盾（？）です。

一番最初の呪いごっこの話の中では、天使として目撃されてしまったようなかかれ方をされています。（て言うかそういうふうに書いてしまいました）

気づいている人はいるかいないかよく分かりませんが、それだったらなんで覚えているのかなって言う話。

答えはひとつ

ふぁんたじーだから

なんてかいても、こんなふうにことを大きくした以上納得しないですよね。

答えは、それが少女としての私だったから。私が今自分は少女であ

ると認識したらそれは少女である私になる。今自分は天使であると認識したら他からも天使という認識になる。

という設定です。

だから、最初の呪いごっこで発見されてしまった私は少女としての私で、中年男のところで少女に発見されたときの私は、天使としての私であったと言うことです。

話がややこしくなった気もしますが、まぁそれはかいてしまったことへの後悔と言うことで。

天使だって、汚いものはあんまり好きにはなれません　食欲旺盛（すぎ）（前

どんなに不清潔でも、心が澄んでいれば好きに慣れますということを思った人。

実際に実行できますか？

天使だって、汚いものはあんまり好きにはなれません　食欲旺盛（すぎ）

「嗚呼、うまかった。ご馳走様でした」
汚い少年はそう言って笑った。笑ったからといっていい奴になるわけもなく、汚くって意地汚いという印象は変わらない（ダブルで汚い）。
飴を与えた後、少年は一瞬幸せそうに微笑んだがまた倒れてしまった。ぼろぼろの自転車が本当にお似合いであったあの情景は、まだしっかりと覚えている。だって、三十分前の話しだし。
その後餓死してさようならと言う展開になるかなっと思ったけど、それは天使の私にはタブーと思われる行為だと思われたから、しょうがなく食物（エサ）をわけてしまった。つ　い　で　に、私は本当は優しいが素直でない奴というわけではない。そこは、結構重要だと思う。
そしたら、倒れた少年は私が持ってきた食物《カップラーメンの生の奴》をバリバリと食べ始めたのだ。多分、半径三十センチ以内にあるものは全て食べてしまう癖でもあるのだろう。その時も容器後と食べた。吐き出したけど。そして、余すことなくカップラーメンの中身全てを食べつくしたところで、一言そう言ったのだった。
「それはよかったわね」
私の顔は引きつっていなかっただろうか？　ついでのついでのついでだけど、私のスカートが汚れてしまった。どうして何によって汚されたかは書くまでもないだろう。さらにそのついでだけど、私はまだ夕食を食べていない。天使もおなかがすくのだ。目の前の少年と同じ生物の十倍は食べなければ、倒れてしまうこともある。
「ごめんね。貴重な食料を僕なんかのために。だけど、どうして僕に食料を与えてくれたの？　」
声だけ聞けば、少女漫画で主人公と結ばれると思われる優しくてかっこいい美青年のようだ。髪の毛は茶髪でちょっと長め、王子様キャラって感じだなという妄想も充分に働く。まぁ、本当に髪の毛

は茶髪で長めなんだけど。ぼさぼさだけど。
　っていうか、謝るんだったら軽く遠慮しろよ！
「うーん、良心によってかな。のたれ死んでいる生物を無視できるほど、私はひどくないから」
　もっとも、スカートをあんなもので汚されてまで持っていられるほどの良心ではないが。
「じゃあ、俺のことまだ知らないのか」
　ボソッと少年が何かをつぶやくのが聞こえた。
「えっなに？」
「否、なんでもないからさ。とにかくありがとう」
「……」
　そう改めて言われるとちょっと照れるかもしれない。ありがとうねぇ。ききなれない言葉。
「お礼、だよ」
　少年は、私の手の上にコイン三枚を置いた。ってうそ！　これ、このカップラーメンの三倍の料金じゃん。
「いいよ、そんなに」
　私は少年にそのコインを返そうとするが、少年の手は中々捕まらない。ふとそんななか、目が合う。
「いいよ……そんなに」
　私はすぐうつむいた。目をこれ以上あわせていられなかった。少年の目は優しさと、嬉しさであふれていた。純粋で無垢なものに触れてしまった気がした。決して、手の届くはずのなかった。
「じゃあ、またきてよ。また、なんか食べさせてよ。それで、これみっつ。ちょうどだろ？」
　耳に届く少年の声は、汚い少年の声とは思えない。

天使だって、学生です　学校ってあんま好きになれない（前書き）

学校好き？

天使だって、学生です　学校ってあんま好きになれない

「あいつがきたぞ、また」
私がクラス　否、校門から学校に入った瞬間誰かがそう言った。あいつ、それはもちろん私。呪いごっこ……否本当に向こうからの認識としては呪われた子なんだしね。私は。もっとも、それぐらいの事で傷ついたりはしないけどね～。天使だし。
「おは……」
私の学校には「挨拶し隊」と呼ばれる人たちがいて、その人たちは朝校門の前に立って生徒みんなに挨拶をする人たちなんだけど、その人たちでさえ私を避けた。
あの、私挨拶し隊の人たちの中に知ってる人一人もいないんだけど……。私そんなに有名になっちゃったの？　こういう有名のなりかたはかなり悲しいものがあるんだけど。
しかも、私が歩くと周りの人がみんな引いていく。その様子は、モーゼが追手から逃げるために、海を開いたみたいなんだけど。私ただの、少女なんだけどなぁ。ただし、小学生で天使の。
昇降口に行って上履きをのぞいてみると、小さなかわいいメモに「でてけ」と書いてあった。なんで、こんなかわいいメモわざわざ使ってるんだろう？　私への優しさか？　あり得ない話だけどさぁ……。
「お、アミン！　ハロ！」
背後からかわいらしい同年代だと思われる少女の声が聞こえた。私のいる方に向かって走っている。モーゼの道を利用する気らしい。だけど、本当のモーゼの話だと背後から追ってきた人々は海に落ちておぼれ死ぬんだよね……。
「うわぁ。アミン、呪われた子に触っちゃった！　どうしよ……。私も殺されちゃうよ」
案の定走っていた子は私にぶつかってきた。みごとにおぼれ死に

ましたね。っていうか、私に触ったら殺されちゃうなんて噂、もしかして広まってたりする？　まぁ、私はみんなからみれば死神っぽい存在だったんだっけえ。

「たしかに、怖いね。エミン。そういえば、この前となり町から殺人鬼が逃げだしてきたみたいだし～。ボロボロな姿の少年なんだって」

「うわぁ、一見わかんないじゃん」

二人は、のんびりと話している。殺人鬼ねぇ……。そんなのが来ちゃったら私の仕事がまた増えちゃう。嫌な世の中だなぁ。

天使だって、成績よかったりする　　のっち（前書き）

のっち
呪いのこをもじってノッチ
ていわれても否定する要素無いと思う。

天使だって、成績よかったりする　　のっち

学校の授業は普通に進んで行く。ついでに言うと、私は成績は良いほうである。通知表で、大変良い意外をとったことがないのだ。成績に関してだけ言ならば……。生活態度についてはもう少し以外取ったことがない。嘘じゃないの。否、本当だって。真剣に。

まぁ、仕様がないでしょ？　私は天使でしかないのだから。学生行は苦手なの！！

と言う感じでさらっと流して中休み。相変わらず私は一人。っていうか、私は今年授業時間意外にクラスメイトと話していないきがする。っていうか、中休みはいつも天使業に専念してたような気がするんだよね……。この学校よく人が死ぬから。何故か知らないけど。

遅刻者とか欠席者や早退者も多くて、しかも全部仮病じゃないから不思議なのよね。といっている私は休んだことがない。やっぱり天使って丈夫。

「ねぇ、知ってる？　この前のっちがカップラーメンもって走ってたんだよ～。超受けない？」

「うっそぉ、マジ？　のっちカップラーメン食べんの？」

「じゃない？　お嬢様みたいな澄ました顔してるけどカップラーメン持ってたなんてね。しかも持って走ってるってお恵みのつもり？」

「誰への？」

「殺人鬼への」

「何でソコで殺人鬼！？」

なんていって笑っている声がＢＧＭとして聞こえる。ついでに言うと、のっちは私ではない……はずだ。私の名前には、「の」も「つ」も「ち」も使われていない。しかも、のっちなんて親しみを込めて読んでくれるはずもないしね。

だけど、それはまるで私だ。

お嬢様のような澄ました顔も、カップラーメンを持って走ったことも、私のことだったとしたら事実だしね。しかも相手は、ぼろぼろの少年。その少年も殺人気の条件にあってるし。もう笑い話にしかならない。

《来て》

天使の私に学生の私が戻るのは突然のことだ。

場所は理科室。二回の端にあって、雨漏りが目立つ部屋。死にそうなのは、定年退職をなんでしなかったのかと不思議がられている別名天然記念物と言われている、老いぼれの理科教師（実は五十代）だと思われる。

私は天使。学生なのではない。

天使だって、嫌いな人がいる　　甲羅（前書き）

甲羅　このキャラクターの描写。上手くいきませんでした。ごめんなさい。

天使だって、嫌いな人がいる　　甲羅

「あぁぁ」

理科室の扉を格好良く開けてみたけど、中には誰もいなかった。つまり、間違えちゃったってこと。天使の勘はまたまた外れる。私天使首にされて堕天使になっちゃうかも（笑）って笑えないか。まぁ、とりあえず理科準備室でものぞいてみる？　うん、のぞこうよ。

とおもってづかづかと理科室に入り理科準備室の扉を開けてみるんだけど中には誰もいなかった。うぅ、外れまくりだ。天使の勘。これでも少なくとも五年はやってるはずだよ？　天使。私はまだまだ所詮下っ端かぁ。

とりあえず、この真上にあるパソコン室にでも行くか。と思ったが速し、私は階段を駆け上る。天使の羽使ってもよかったけど、学校で使うのは何となくもったいなくてね～。それに、生活指導の教師とか知り合いとか風紀委員にあっちゃったら悲しいしね。特に生活指導の甲羅。あいつは心の器が小さくてねちねち五月蠅い。そして、亀の様に足が遅い。本名が小浦だという事をかけて甲羅。嫌みを込めて私たち生徒は陰で甲羅と小浦のことを呼んでいる。もっとも、私には陰口を一緒に叩けるほどの中の友達はいないが。

「こんどはだれかいるかな～？」

私はコンピューター室の扉を開けてみるとそこには誰かいたけどなんと、甲羅！！　いきなりあっちゃったよ。

「おーい、どうした？　なんかようか？」

気軽ーに言うけど心の底では何考えてんだか。

「いえ、特にありません。失礼いたしました」

「おい、僕と話したくないのか？　心に後ろ暗いところがあるのか。そうだな！　そうだろ！　このまえ放送室の窓割ったのはお前だな！」

「……」

来ました。心の器の小ささが見えてきてます。ただ単に疑り深いように見えますがそういうわけではありません！！　っていうか、天使状態の私ならすぐ何をやっても忘れてもらえるんだよね？　私の存在自体を忘れてもらえるんだし。よし！　なんかやろう！　あっでも、天使って悪いことやっちゃだめなような気が……。

「おーい無視するな！」

とりあえず無言で立ち去ろう。そして、理科室の下の図工室にでも行こう。きっと会えるはずだ。老いぼれの理科教師に。

天使だって、つらいんだよ　　少年と母の愛の物語（前書き）

こういうのは、やるつもりではなかった。

定番は嫌い

天使だって、つらいんだよ　　少年と母の愛の物語

「う……あぁあ」

とりあえず、図工室には来てみた。だけど、そこに瀕死の状態で倒れていたのは老いぼれた理科教師ではなく、小学二年生倉に見受けられる少年だった。あぁ、もうまた間違えちゃったよ。今度こそ天使首になっちゃうかな……。まぁ、そんな私のことは置いといて死因は老衰ではなく……うーんなんなんだろう？　血が出てるのは分かるんだけどな。

いつもなら、普通に図工室に入ってさっさと用事を済ませちゃうよ。だけどね、今は図工室のドアの陰に隠れてタイミングを見計らっていた。何故なら、もう一人中に人がいるから。女の図工教師がね。え？　天使の姿なら忘れてもらえるんだから堂々と中に入れって？　――そんなの出来るわけないじゃん。

図工教師、その倒れて血をふき出している少年を見て泣きそうになってる。しかも、謝りながら。

「ゴメンね。翔ちゃん。助けられなくて。こんな私でゴメンね。私が全て悪いんだよね。ゴメンね、ゴメンね。……ごめんなさい」

とね。ここからぎりぎり見える彼女の横顔はとても暗くて、いつもの気丈な図工教師を思い起こさせないほどだ。何て考えている間に図工教師は少年（翔ちゃんっていうのかな？）に抱き、顔をうずめる。もう少しで死体になる少年に。

「私が……私が、助けられなくて。私が駄目な子で。駄目な母親で。母親失格だよね。あはっぁぁ」

無理やり笑っている図工教師の顔を見るのが辛くてそっぽを向きたくなる。でも、私は天使。そっぽなんて向けない。

今、ここからでていって仕事をしよう。それなら羽を開くべきだ。

――　羽よ開け　――

バサバサッッ

羽はいつものように音を立てて開く。その音に驚いてこっちを向く図工教師。私はゆっくりと図工室の中に入って行く。開いた窓から時折雨粒が入ってくる。カーテンはゆらゆらと動いている。彼女、その図工教師が動きを止めても、ほらこんなに世界は動いてる。

「天使……様」

「そう、私は天使」

「お願いです！　私はどんなことでもしますからこの子を、この子をお願いだから助けてください！　このこはまだ、七歳なんです。なのに死ぬなんて、あんまりです！　お願いです。お願いです」

「それは……できません」

「なぜ！　天使様！」

つらいよ。最後に私の姿を見てこんな勘違いして必死に命乞いをする人を見るのは辛いよ。うんざりだよ。でも、天使さまは……定めを守らなければならない。感情を介入させてはならない。

「私は何も出来ません。それに、それが定めなのです。この子が死ぬのは運命なんです。逆らえないのです。逆らったとしても、彼はその時には生きていないでしょう。生きていても今のように戻れないでしょう」

「でも！　私この子にまだ謝ってないんです」

「引き止めないでください。彼が無事に天国にいけません」

もちろんはったり。つまり嘘。天国なんてない。地獄がないならば。唯一光の国と闇の国、そしてその上のほうに三大神の国がなんとなく存在してるだけ。

でも、人間にはやっぱり天国という言葉は効く。

「だけど……」

あきらめきれなそうだけど。

でも、もうあきらめるしかないよ。死神が鋸持ってやってきちゃ

ったし。いま、記憶と魂取り出しちゃったし。光る玉が二個中に浮いてるし。

「大丈夫、きっとまた生まれ変わってきますから」

私は少年のために取っておいた笑顔で言う。人を最後に幸せに出来る笑顔で。人間にしか出来ない笑顔で。

「あぁぁぁっ」

今まで泣かないように我慢していたのだろう。だけど、限界にきちゃったみたい。私、天使の前で涙を流し始めた。

天使だって驚いた　悪臭（前書き）

いきなりさ
君死者の匂いがするよ
って言われたら
突っ込みどころの多さにとまどうだろう

天使だって驚いた　悪臭

「おまえさ、今日誰か殺してきたか？」
「はい？」
私は手に持っていたカップラーメンのお湯を注いでない奴三つ全部をつい取り落としてしまった。否、まず問題なのはね会って第一声が今日誰か殺してきたかってなに……。私天使なのに人殺しなんかと勘違いされちゃってるよ～。っていうか、なんかいつものようにそれが日常のようにさらっとそんな事を言った君がすごいと思う。
ま、そんな私の重いとは関係なく目の前の少年は自分の食料の確保のために地に落ちたカップラーメンたちを拾って行く。ひょい、またひょいと。そして三つ全部が自分の手に収まったと確認をしたらまたこっちに視線を投げて語りだす、いきなり。
「あ、ごめんごめん。なんかいきなりだったよな。とりあえずこんばんは。今何時？　まぁ何時でも言いか。それより何時も食料サンキュウな。で、本題なんだけどさお前からなんか死んだ人の匂いしたんだよ。まぁそんなの気のせいだよな。俺の完全なる互い違い、だろ？」
「……今日は一段とよくしゃべるね」
全然説明になってないじゃんっていう本音は言う必要なかった。言って関係を悪くするほど私は馬鹿ではない。とりあえず冷静に考えよう。まず一言目死んだ人の匂いがしたんだよっていうところ。これはそのままの意味っておい、死んだ人の匂いってなんだよ！？
まぁいい、とりあえず死んだ人の匂いね。ぜんぜんとりあえずじゃないけど。で、次は気のせいだよな。ごめんなさい、気のせいではありませんでした。最後は完全なる互い違いってこれか！　確かに全然意味わかんない。完全なる互い違いってなんだよ！　多分、思い違いの間違いだろう。
つまりは、『君の周りで誰か死んだのかなって思ったんだよ。ま

ぁ、気のせいだよね。僕の完全なる思い違いだね』という趣旨のことを伝えたかったってわけだ。口調が全然違うけどそこは気にしてはいけないところ。

「だよな。今日は機嫌がいいのかな？」

そう言って彼は笑う。でも、なんとなくいやな予感がする。いつもは、ここまでしゃべらない。機嫌がいいときは特にここまでしゃべらないはず……。

「でさ、死の匂いは本当にキノのせいだよね？」

「……気のせいじゃない」

私は内容が無いようだから躊躇したのではない。ただ少年がかんでしまったから少し躊躇した……だけ。

「な？　気のせいじゃないだと！？　本当に俺の質問の意味わかめってんのか？　俺はお前の周りで誰か死んだんかってきいたわけだぞ？」

やっぱり不自然なほどよくしゃべる。そしてもう一つ口調がなんかやばい感じ。

「死んだ、確かに彼は死んだ。それが？」

「それがじゃねぇぇっ！　人が死んだ匂いをつけて俺に近寄るな！　気持ち悪い！　やめろ！　くんな！　カップラーメンもってきてくれたことはありがたかったけどくんな！　やめてくれ……やめてくれ」

そう叫んだあと私をにらみつけてくる少年。その目には何かとてつもなく深い闇が浮かんでいた。

天使だって驚いた　悪臭（後書き）

遅れてすみません！！！

天使だって、迷うときは迷うけどいいでしょ！？　別に　　開き直っちゃっ

天使の仕事は義務だし生きる意味
それを失ってまで本当にいるのか？　本当に選ぶべきなんか？
あいつなんて
自分優先するべきだろ

あのあとの彼と過ごした時間は、表面上は何もないようなのになんか辛い時間だった。そのことが悲しくて辛くてとてももったいないような気がする。――彼との時間はそろそろ終りそうな不安定さを持ってき始めているから。人と深く付き合いすぎてしまったときのように――

ずっと無言だった、お互いに。彼に話すために考えてきていた話も全てあのことがおきたら忘れてしまったし、彼も無言……。やっぱりとてもあーゆー状況は気まずい。いつでも緊張していた感じがする。――これ以上壊さないように壊れないようにって――

『じゃ、またいつか』っていう何時ものせりふさえお互いに言うことができなかったな……。そして、そのあとにお互いに笑い会うこともできなかったな。

そんな後悔にまみれていても私は天使以外のものにはなれないし、天使として生きなければならないから天使の仕事をしなければイケない。これは使命だし義務だし、私の存在意義の全てといってもいいから。でも、やっぱり仕事中もついさっきのことを思い返しちゃう。さっきああすればとか、どうしてあんなふうにしちゃったとか……、駄目じゃん私。そんなんじゃ駄目じゃん。それでこれからも引きずって生きちゃったらどうすんだよ！？　私は天使でしかないんだよ！　人間と相容れて仲良くしあうなんて普通ありえないしありえちゃイケない！　後悔なんかして、天使の勘はずしまくって仕事まっとうできないなんて馬鹿だ。ただの馬鹿だ、くずだ。生きるに値しない。私は……自分のために生きているのではない。光姫様のためだけに生きているの。私は間違っている。

あぁぁぁ、ここだここ。いたいた、勘がなんか冴えて来た。お！

予想通りあれはお婆さん。しかも、ちょうど道の真ん中で倒れている。転んでショック死だ！　勘が当たった！　久しぶりだ～。勘

当たるの。ではでは、さっさと仕事。
《嗚呼、天使様よ。私は今から死んでしまうのでしょうか？》
「ええ」
あれ、このお婆さん変に信心深い。なんでだ？　ん、これは？
そのお婆さんの首には十字架のペンダントがかかっている。嗚呼、キリスト教徒か。
《では、私に残されたときは？》
――もう……ない――
私はただ心の中で答える。その時には目の前にいる死神は虎視眈々とお婆さんを見つめている。そして、死に逝く時の最後の思い出に残るような笑顔を一つ作ってお婆さんを見る。すると、おばあさんは微笑んでくれた様な気がした。
今こそ時が来たんだね。彼女の。
死神はかまを振り下げた。するととても透き通るように美しい心の美しそうな二つの光が出てくる。その光は本当に美しく輝いている。そして、何時もどおり死神は黄緑の光をポケットの中に入れて、私はピンクの光を掴む。さぁ祈ろう姫のためだけに。
――光姫様。こちらが本日の記憶です。どうぞ、お食べください――
そう祈るとピンクの光は消えた。何時もと同じ。否、それと一緒に私の迷いとかも消えてしまったような気がした。

天使だって、聞き耳をたまには立てるよ　無関心なんて嘘です（前書き）

無関心って口で一時ながら
聞き耳立てる人
自分の近くにやっぱいない？

天使だって、聞き耳をたまには立てるよ　無関心なんて嘘です

「おはよう～まみ」
「おはよう～みま」
能天気に生きている私と同じクラスの女子たちは、相変わらず私を無視しながらも勝手に友好関係をはぐくんでいる。っていうか、みまって変な名前。でも、口には出さない。さすがに無視から一歩でも範囲が広がったら、天使パワーでこの学校を焼き尽くすって違う。焼き尽くすのはあの女のこの過去編だけで充分。それに、天使パワーってほとんど使えないし。天使ほとんど人間と同じだし。
だからこそ、最初こそは人間たちと仲良くなってやろうって思ってたし、見事仲良くなれたんだよね。でも、そのあとはその分の幸せだけ嫌われた。天使と人間の相容れなさ加減が悲しい感じがしたんだよ。当初は。今は、あきらめている。私は天使でしかないしみんなは人間でしかないし。まっ実際のところは人間と付き合って行くのに疲れたって感じかな？　まぁ、私だってもともと人間だったらしいんだけどさ。
「ねぇ、知ってる？　今度はうち等の街に出たんだって。殺人鬼」
「うそぉ～怖いねぇ……。夜出かけるの止めようかな？」
へぇ～、殺人鬼でたんだ。あ！　あの内蔵グチャグチャになってた人殺人鬼にやられてたのか。でも、あれに呼ばれたのは昼間の某橋の下じゃなかったっけ？　それじゃあ、夜出て行っても大丈夫なような……？　そして、うち等のって何この町所有してる気になっている！？　ここはみんなの町だぁ～！！　なんて、たまにはふざけるのもいいかも。
「何弱気な子といってるの？　こういうときこそ夜外でて、殺人鬼を捕獲して親に誉められてお小遣いをアップするチャンスじゃない！」
うぁあぁ、この人打算大量だ～。すご。ここまで人間的な小学生

いるなんて。私はこんな小学生始めてみた。さすがのまみちゃんも、っそそうだねなんてどもっちゃってるよ。仲良くてもこういう時やっぱ辛いんだな。

でも、殺人鬼かぁ……。やっぱあいつにこにてるような？　でも、ありえないよね。人殺しをあそこまで嫌悪する時点でちょっとありえていたらいやだな。人殺し嫌いの人殺しって結局何なんだよっていう感じだし。存在否定する気は無いけど。

「あ、そういえば私怪しい人知ってるよ」

「え？　本当？」

真美ちゃん名誉挽回かな？　でもな、無闇に人をうたがっちゃぁいけねぇよなんて思ったけどそんな事を口にする必要は特に無い。から、私はその続きを聞こうと集中する。だって、気になるじゃん。天子に好奇心あって悪い？

「うん、本当本当。私見たもん、あの殺人鬼の特徴に会いすぎて照らしすぎる人。絶対に見たからね！　信用してよ」

「わかったよ。じゃあ、どんな人？　だれ？」

「あそこの小高い岡の上に暮らしてるお兄さん！」

……やっぱあいつか。かわいそうに。同情する義理なんて無いんだけどさ。同情されてもどうせ喜ばないんだけどさ。

天使だって、別れがアル　　それは優しいんじゃない、ただの意地悪（前書き

ついに別れるときが来る
別れても何もかわらなかったとき
天使はどうするんだろう？

天使だって、別れがアル　　それは優しいんじゃない、ただの意地悪

「なんでまた死者の匂いつけてきたんだよ！？」
「いいじゃん、別に。私の勝手じゃないの。っていうかしょうがないの。それが私の生きるための仕事なんだから、お前なんか働いてない奴に何か言われる筋合いないし！」
「……」
やばい、会って早々につい切れちゃったら無言で返されたよ～。どうしよう。なんかとてもいらいらするしなんか……困るって言うかなんって言うか。あーもーなに考えてんのか全然分からないし、自分が！
でも仕様が無いんだよ。それが私の生き方だし生きる方法だし……ってなんかこの言葉がすごく言い訳っぽく聞こえる。自分への言い訳っぽく。別にそんなわけじゃないのに。私はそれなりにこの仕事辛いしあぁああもっと言い訳っぽい。あいつから逃げるための。
それより、この無言どうしよう。すごく気まずい……。謝ろうかなってなんで私が謝らなければいけないの！？　私は悪くないでしょ？　黙ったあいつが悪いんでしょ？　っていうのもなんか言い訳っぽい。なんかいらつく。でも、その苛つきもすぐ収まる。
「まっそうだよな」
あいつはさらりと受け流した。でも、それはそれでなんか気になるし嫌だ。なら結局どっちがいいんだよ！？　って話なんだけど。
ま、さてと。私もそろそろ話を切り出さなければね……、別れの。
「それでさ、そろそろこういうの止めない？」
「こういうのって？」
「私がカップラーメンをお前に与えにここにやってくる一連の作業」
「何故？」
「私が疲れたから。だってこの岡登るの大変……」
「否小さいし大丈夫だろ？」

「小さいけど角度……」
「ここの角度の何処が急なんだ？」
「ちゃかさないでよ！　とにかく疲れたの。だから私はもう来ない。それの何処が悪い？　私は働いてるの。忙しいの」
「ふーん、じゃあな」
「えっ」
引き止めてよって言いたかったけど飲み込む。言っても何にもならないから、言うことに意味が無いから、何て理由じゃない。私からつかれたって言って私からここにはもう来ないって天使である事の決心をゆるがせられないように言ったのに、なのに引き止めてよって一言は勝手過ぎるじゃない。折角私は解放されたのに……。
私は解放されたんだよ。嬉しいんだよ。そう無理やり思い込んで笑ってみる。本当に笑えているかは分からないけどゆっくり落ち着いて笑ってみる。そして、一言「さよなら」と言って歩き始める。彼に背を向け。
「あああ、ちょっと待った。うんうん、やっぱりそうだ」
「なに？」
私はつい振り返ってしまった。未練が私の首を動かしたような気がする。
「おまえ、絶対にツインテールの方が似合う。あと、友達ごっこでもいいから誰かと仲良くなろうとしなよ。きっとおまえうまくやれるから。僕より絶対に」
「うん」
考えるより前に口が勝手に動く。
これが最後の彼との会話だった。

天使だって、天使だって、天使だって、天使だって――……

――――……

（前書き

天使だって、天使だって、天使だって、天使だって――……

「おはよ、まみ」
「おはよ、みま」
相変わらず私のなぜか斜め後ろの席の2人は一緒に登校して来てそれなのにもう一度おはよ、と挨拶をしなおしどちらかの席に集まって会話を始める。あまりにも日常的過ぎる光景。なのに、私はうらやましいなんて思ってしまったような気がした。話し相手がいることが。
「ねぇ知ってる？」
「なにを？」
「一組の桜庭君、恵ちゃんとできてるんだって～」
「それなら知ってる。でもひどいよねぇ、私狙ってたのにぃ」
「狙い高すぎだ！　もっと身近なところ狙えよ～。あんなかっこいい子みまなんかと付き合ってくれるわけ無いじゃない～。雲の上の存在よ！」
「まぁ、そうだけど……断言するなんてひどいなぁ」
「だって、事実でしょ？」
「うっ」
ばっかみたい。天使がなに言ってんだか。天使に話し相手は要らないし、私が欲しいのはあくまでもいつまでも隣にいてくれる人――友達って言い換えてもいい――だけ。決して朝内容が無いようなお喋りをする相手はほしいわけではない。でも……、やっぱり何故か羨ましいんだよね。そう自然に楽しそうに喋ったり遊んだりできる彼女等が、私と全然違う人間の彼女等が。
尤も、人間になんていう低俗な生き物に逆戻りする気は無いけど。光姫様が私にはいるから、彼女のためだけに私は生きてるから、彼女のために生きられないのならもうそれで私は意味の無い存在。
「じゃこっちは知ってる？」

「えっなになに？」
「殺人鬼、捕まったんだって」
「うそ、本当！？」
「ホンとホンと。あの私が昨日言った岡の上の人なんだって犯人。どうやら昨日の七時ごろ自首してきたみたいなんだって～」
え！？　殺人鬼が岡の上の人？　でも、でもあいつはいい人だったでしょ？　私になんかひどいことしなかったし、私の隣にいてくれた……。そんなわけないよね。あいつが犯人なんて私の聞き間違いだよね。それに七時ごろ私がさよならを……言った後？
「へぇ～。でも、なんで折角隣町まで逃げ切ってたのにいきなり自首してきたんだろう？　それって不自然じゃない？」
「そんなこと私に聞かないでよ～。まぁ、もしかしたら仲間に裏切られた、とか！？　それで辛さのあまり生きる意味をなくし自首、みたいなっ！！」
仲間に裏切られた。
私、昨日何をやったの？　私、なんで昨日あいつにさよなら言いにいったの？　なんで私はあいつにさよならを言わなければいけなかったの？　それは光姫様に天使として仕えてるからって違う。そんなの関係ないよ。あれは、私のただの勝手でただのわがままで……。じゃあ、あいつの生きる意味を奪ったのは私なの！？　違う違わない違う違わない違う違わない――。
違わない。
「あっそれありかも、それで刑はどうなるの？」
「まだ裁判やってないからわかんないけど、いっぱい殺してんのなら死刑じゃない？」
「死刑！！　それ本当！？」
つい、叫んでしまった。無意識に口が動いてしまった……嗚呼失敗失敗。二人とも叫んだ私を見て表情を固めてる。また、クラス中の人がこっち側に視線を集めてくる。
そのあとまみはちょっと迷ってから呪いの子の質問に答えたら呪

われるのかもしれないと思ったのか、私のことを無視して話し始める。クラスの人たちも何事も無かったようにまた喋るのを再開する。
「うん、きっと死刑」
「だね。殺人者なんて生きている意味ないよね」
そんなこと無いってまた叫びそうになったけどこれ以上周囲の注目を浴びたくないから、その言葉を飲み込む。
つまりだ、彼は私のせいで死にそうになっているってことだよね……、私のせいで。助けなきゃ……絶対に。

天使だって、無力　所詮少女（前書き）

私は天使です
でも特別な力なんてほとんどない
人間以下なんです

天使だって、無力　所詮少女

助けなきゃ、といっても私には手段が無い。助けるといってもそもそもあいつが今、何処でどうなっているか全く予想もつかない。私には生きる最低限の知識程度しかもっていないし、光姫様に尽くすための力しかない。私は所詮無力なんだ。私は所詮小さな一少女でしかないんだ。天使と名をうってもそんなもんなんだ。漫画の世界ほど天使って強くも優しくもないし、そんな天使も存在するかもしれないけど私は違う。私は……悲しむことぐらいしかできない。

だけどさ、助けたい気持ちが本物っていうことも分かる。助けたいという気持ちがうそでないことは事実なの。絶対の……。うぅなんか泣きたくなってきた。目が熱くなって頬が熱くなって鼻につんてきてって駄目。今はまだ違う。今はなくときじゃない。せめて、あいつとの幸せのときを過ごしたあの岡まで耐えよう。

ここで泣くなんて悔しすぎる。

「とにかく、行こう。岡に……」

岡に行けば何か分かるかもしれない。岡に行けば奇跡が起こるかもしれない。そんな事を考えてしまう私がとても情けなかったけど、でも少しぐらいそういう確率を信じてもいいよね？　少しだけ、ほんの少しだけ……。

「おぃまてこらぁ、授業中に学校を抜け出すとは一体どういう両天を持ってんちゃかあぁ！？」

「えっと、それをいうなら両天ではなく了見では……」

「細かいことを気にすんなちゃかぁ」

追っ手が来た。私なんかという呪いの子にまさか追ってなんかがくるとは思ってなかったよ。しかも、学校一うざいと生徒たちには言われている口癖がなぜかちゃかぁの自称熱血教師こと熱田太郎がくるとは思っていなかった。嫌だなぁ……正直こういう人におわれるのって。天使パワー使いたくなるな……。足速いし。私の足の速

さじゃ絶対逃げ切る前につかまるし。

――早く来て――

その時、頭の中に何時もの声が響く。助けを求める死に逝こうとしている人の声が……しかも何故か聞き覚えがあるような気がする。でも、その声を聞いたとき私には天使パワーの活用が許される。

場所は岡、何時もの岡。被害者は多分少年。よし、飛ぶぞ。

――羽よ開け――

バサっという何時もの音をたて羽は開く。そして飛ぶ！！　右足で踏み出していっきに……。

その時既に、物語はまもなく終ろうとしていた。

天使だって、最後は……（前書き）

少年のＫＹさ加減
自分的には
気に入ってました

天使だって、最後は……

そこには一人の少年が辛そうに寝ていた。血にまみれて……。私は一瞬頭が真っ白になってしまいそうになる。

少年は私のよく知るあの少年でしかなかった。人違いなんかじゃなくて限り無くあいつでしかなかったんだ。

《お前天使だったんだ》

不意に響く頭の中の声と連動するようにあいつは笑う。思い残すことは無いとでもいうように……。やっぱり目の前の少年はあいつでしかない。そう思い直すと胸がずきずき痛むような気がする。

天使の癖に。

結局彼の言うことに私は一言も返せなかった。なんかやるせない。

《驚けよな、たっぷり。僕も今結構驚いてんだからさ》

血がとどめなく流れていて今にも死んでもおかしくないのにあいつは僕は元気と言いたげにやっぱら笑っている。私でさえ笑えないのに。私でさえ死んじゃいそうなあいつの姿が痛々し過ぎて笑えないのに。

お前は強いよ。

結局また私はしゃべることはできない。

《そう、僕だよ。噂の殺人鬼は僕。おかげで逮捕されそうだよ。本当に最近の警察は優秀。僕にこんな派手な傷負わせちゃってさ。》

あいつは相変わらず笑顔を崩さない。肩から血は流れ続けているのに。あと二分。これがあいつの残り時間。私とあいつには長すぎて短すぎる時間。

果たして私はあいつと何言交わせるだろうか？　会話はちゃんと成立するか……。結局また黙り込むことしかできない。

《ん？自首して捕まった話はどうなったって？あれは嘘。お前をもう一度ここにこさせるためのな。お前以外と曲がんないし》

一言一言が今はまるで宝物のように大切なのに他愛もなすぎて、

まるでこのあともずっと幸せな日々が――幸せ……そう幸せだった。楽しかった日々が――いつまでも続いてくれるような気がして、なんかとても悔しい。続くことができたはずの時がなにかによって壊されてしまったことが。

今こそ泣きたかった。かっこ悪くてもいい。人目を気にせずただ泣きたかった。でも、天使は泣けない。私はどんなに辛くても光姫様のために働かなければならない。それが私の唯一無二の存在理由だから。

また私は言葉を返せない。

《で、お前にお願いがあるんだよ》

お願い？　なんだろう。できるだけ叶えてあげたいけど……。私は始めて、今日あってから初めて真っ直ぐにあいつの目を見つめる。真っ黒のちょっとにごってしまったような目を。そして、ひとつあごを動かしうなづく。

結局私はまだ喋ることができていない。

《この自転車、よろしく。粗大ゴミにして捨てるのはもったいないから》

……、あっそうですか。それだけですか！　遺言。なんだよ……昨日いってくれたことのほうが数倍ましな感じするんですけど。でも、ちょっとだけ嬉しいかもしれない。この黒い自転車は確かにぼろぼろだけど、でも私は形見を持っていることでいつでも思い出せそうな気がして。

それに、天使の羽って本当に体力の消耗っていうのが激しいしね。

刹那、死神の鎌が彼の胸に舞い降りる。時間がきたようである。

――私は笑えていたかな？

天使だって、前に進むよ　求め往かん（前書き）

さぁ、次のステップへ……

天使だって、前に進むよ　求め往かん

四月。

桜がようやく散った頃、私は何とか無事進級！　しかも、私が今度から通うことになった中学校は地元の有名私立！　つまりは、もう今までの小学校の人と会わないですむってわけよ。

だから、今の私をもう呪いの子とからかう奴もいない。

まっ私はついに開放されたって言うわけよ。尤も、私は天使で学生というところはかわっていないのだけれど。

そして、後何個かかわったところがある。

一つ目はヘアスタイル。白いリボンで今はツインテールにしている。そしたら、意外と似合っちゃったので自分でも結構驚いてたりする。

二つ目は服。いつもの真っ黒いワンピースは卒業して、学校指定のセーラー服を着ている。それが意外と可愛くて結構気に入ってたりする。

三つ目は自転車登校。折角貰ったんだから使わないとって思って、登校するときは何時もあのおんぼろの黒い自転車を使っている。あと、天使として働くときも移動手段として使ったりしている。意外と運動になって太らなくなるしね。

で、最後。それは……

「おはよう～、みぃちゃん」

「はろ～、うつみ」

私にも、しっかりと話せる相手ができたこと、だったりする。

否、話せる相手ならあの事件の時もいた。卒業する前の最後のどたばたで、私と桜と共に現れた悪魔との初対決の時も。嗚呼、なつかしい。あの悪魔私とかなり性格にてたから楽しかったな。あっちがう、あれは悪魔もどき。本物じゃなかったっけ。

でも、あの時は本当に騒がしかったな。悪魔がいて、悪魔もどき

がいて、死神がいて……レパートリーが豊か過ぎて。まっいま思い出すことでもないんだけどね。
とにかく、私をあだ名で読んでくれるような友達ができたってわけだ。尤も、向こうは私を友達って思ってくれているかは不安だけど。
それに、忘れていた名前も思い出せた。私が私でなくてまだ幸せだった頃の名前を。だから、充分に感謝。彼女には。
「おっ、みぃにうっつ～おはよ」
「もう、うっつ～なんて呼ばないでよ。蔚の人みたいじゃん！」
「漢字間違ってるってば、もう……。恥ずかしいよ」
「えっなんでわかるの！？」
あはははは。
私たちは笑った。

私のもとにやっと春は舞い降りてきてくれた。
この中にはまだ、私の隣はいない。友達と隣は違うから。かつての少年とやっぱり彼らは違う。まだ。
だから、まとう。とにかく隣は待たなければならない。

そして……

天使だって、前に進むよ　求め往かん（後書き）

隣、第一弾完結です。
なんか、結局三ヶ月くらいかかっちゃってすみません。
気分が乗ったら2弾三弾と書くのでよろしくおねがいいたします。

さて、これからどうしよう？　悪魔編か、中学生編か……（相変わらずノープラン）

あと、ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌｎｅｗｗｉｎｄ．ｚａｓｈｉｋｉ．ｃｏｍ／でのののの最終和とか番外編書いているのでよろしくお願いいたします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0543l/

隣　～自転車に乗った天使～

2010年10月8日14時34分発行